

## 「畏敬の念」－厳しさと優しさの中から感じ取るこわさ－

### 畏敬の念という言葉の持つ意味とは

《広辞苑》【畏敬】(いけい) (崇高・偉大なものを)かしくまり敬うこと。

畏敬の念:おそれうやまう. すぐれた人を尊敬すること。

明治大学諸富教授は、「畏敬の念こそ、あらゆる道徳的価値の中でもっとも重要な価値であり、「畏敬の念」は、それがなくては、あらゆる道徳的価値がその重みを失ってしまうような特別な価値である」と述べている。

「たとえ誰にも見られていないように思えても、実は、人間を超えた向こうから、絶えず、私に視線が注がれている。だから私はどんなときでも、誠実に、一生懸命生きなくてはならない」…一言で言えば、生きることの「こわさ」の感覚。

畏敬の念は、自然をはじめとする万物に、神々のような崇高なものを感じ、人間の無力さを感じることで捉えられるが、私たちは、人に対しても畏敬の念を抱く。畏敬の念を持たれる人と特定の人に対して畏敬の念を持つことができる素養を持った人、このような人たちが形成される組織が、強い組織ではないだろうか。

### 畏敬の念を持たれるリーダー

通常の尊敬する気持ちを越えて、自分から見ても手の届かないような卓越したレベルにある人に対して抱く気持ちを畏敬の念と捉える。そんな畏敬の念を持たれる人は、どのような人であろうか。

人にとって畏敬の対象となる自然が、恩恵と災害のような脅威を併せ持つものであるように、畏敬の対象となる人とは、ただ厳しいだけでなく、優しさを併せ持つ人である。自分自身にも周りにも厳しくありながら、優しさがある人からは、畏れに似た「こわさ」を感じ取る。そのような人がリーダーである組織では、メンバーは「この人の言うことならついていこう」という気持ちと「この人に恥じない仕事をしよう」という意識が高まり、結束した強い組織が形成されると考えられる。

### 畏敬の念を持つことができる素養のある人の育成

一つの技を長い年月をかけて極めるような職人の組織では、リーダーの姿勢や仕事ぶりをみてメンバーが育つので、尊敬の気持ちをもって上級の職人に接することは自然に行われる。しかしながら、現在の多くの就業スタイルでは、一つの技を高めるような仕事は少なくなっており、一般的に応用しにくい。畏敬の念を抱くような仕事をする人に出会うことが難しいかもしれない。

リーダーを見出すことに対して、社員(組織の人員)に畏敬の念を持つことができる素養がある人を育成する方が、組織の土台がしっかりするのではないかとと思われる。子供に畏敬についての道徳教育を行うように、社員に対しても、組織独自の道徳観を認知・意識させることが必要である。誰も見ていないから良い、ではなく、高い倫理観は、「誰か/何かが見ている」という気持ちや、自分が尊敬する「〇〇さんに恥じない生き方をしたい」という気持ちからも形成される。

人間の行動を抑制するものが「倫理」であるが、倫理は人間としての感性で判断できる部分がある。だからこそ、社員の感性を磨き、良い感性を身につけることが、組織の倫理観の高まりにつながるといえる。目に見えない何らかの「こわさ」が推進力や抑止力となり、組織人としての言動に表れるのではないだろうか。

## 人に優しい会社は、会社が人に優しいのではなく、厳しく優しい人が多い会社

高い倫理観をもつ集団であれば、自分に対しても周りの人に対しても厳しくありながら、人に優しく接することができる。優しい人が多くなることによって、人に優しい会社になる。会社が社員に対して用意する「制度・設備」などの環境が優しいのではなく、社員が社員に対して優しいことが、人に優しい会社である。

### ■ 「畏敬の念」テーマに対する取り組み方

- ・ 「畏敬」という言葉の持つ意味や背後にある思想、文化などを広く調べていく。
- ・ 自然や人に対して「畏敬」という観点から会社の経営や組織の運営に取り組む企業がないかを調べ、実際に良い点や懸念点などがあるかを探る。
- ・ 「畏敬」の概念は日本に特有か、他国においても共通して見られるか、他国にあるならどのような性質の国かを調べていく。

参考: 諸富 祥彦 編著 『人間を超えたものへの「畏敬の念」の道徳授業中学校』(2007年)

森 建司 『中小企業にしかできない持続可能型社会の企業経営(2008年)』